

第7回IACG会議報告

昭和62年11月
宇宙科学研究所

第7回のIACG会議は宇宙科学研究所が設営を担当し、1987年10月に京都の新都ホテルで開催した。19日と20日の午前にワーキンググループとパネルの会議を行った後、20日午後と21日に総会を持った。各機関の首席代表は、L. Fisk (NASA), R. Bonnet (ESA, 21日にはV. Mannoが代行)、R. Sagdeev (IKI)、小田(宇宙研)で、総会の議長は西田(宇宙研)が勤めた。総会出席者の総数は40名であった。

今回の会議は、IACGの当面の中心課題として太陽地球系科学(STS)を選んでから初めての会議であったため、この分野における各機関の計画の連携・協調のすめ方が主要な議題であった。今後1990年代の半ばまでに各機関が打ち上げを計画しているSTS分野の衛星は(子衛星を勘定に入れると)20機であり、1989年2月のEXOS-Dが一番手となる。1990年後半に打ち上げられるソヴィエトのINTERBALL衛星とEXOS-Dとの共同観測は、IACGによるSTS研究コーディネーションの最初のケースになるため、各機関からその成果に強い期待が寄せられた。

STS研究コーディネーション推進のための方策として、いくつかの具体的項目について検討が行われた後、次の諸点について合意が得られた。

1. 機関相互間の通信回線の強化：観測スケジュールの交換や観測結果の速報のため。
2. 観測データの抄録から成るデータベースの設置と公開。
3. 衛星状況把握センター(Satellite Situation Center)の設置：衛星群の空間的配置を予報し、同時観測を重点的に行うべき期間の選定を助ける。NASAが担当する。
4. コーディネーションの実務に当たるワーキンググループの設置：Shawhan (NASA)が委員長、西田(宇宙研)が副委員長となった。
5. ワークショップやシンポジウムの開催。

IACGは、宇宙観測の将来計画に関する情報交換をも行う事になっており、そのために現在2つのPanelが置かれている。そのうち"Planets and Small Bodies" Panelは、宇宙研による金星、月、彗星ミッション実施のために、日本における科学衛星・探査機打ち上げ能力の向上を強く期待することを表明した。また"Space VLBI" (電波天文学) Panelでは国際協力による計画の実施に向けて熱心な討議が行われた。

また、ISY (International Space Year)については、主旨に賛同する旨の書簡をIACG General Secretary から送ることになった。